

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：14202

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22592603

研究課題名（和文）認知症高齢者に対する赤ちゃん人形を用いた非薬物療法の効果検証と方法論の確立

研究課題名（英文）Establishment of methodology and validation effect of non-drug therapy with baby doll for the elderly with dementia

研究代表者

畑野 相子（HATANO AIKO）

滋賀医科大学・医学部・教授

研究者番号：30405071

研究成果の概要（和文）：本研究は、認知症高齢者の行動・心理学的症状（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia：以下 BBPSD とする）に対する非薬物療法として、赤ちゃん人形を用いたケア（以下人形療法とする）を展開し、その効果を科学的に実証することを目的とした。様々な BBPSD を有する高齢者に人形療法を行い観察した結果、焦燥感や暴言・暴力の緩和に最も効果があった。人形に対する態度や言葉を分析した結果、人形の意味として①現在と過去の自分の存在をつなげる役割②気持ちの移行対象③高齢者自身が能動的に働きかけができる存在であることが示唆された。また、療法のポイントは、①高齢者が好みの人形を選択できること②導入は、自尊心に配慮して、対象者のために人形を準備したのではなく、セラピストの人形として提示すること③人形と高齢者の視線をあわせること④人形を渡し放しにするのではなく、療法として人形を用いることである。共通して好まれた人形は、目が開眼しているまたは開閉することであった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study is to verify the effect of the doll therapy on BBPSD of the elderly through participant observation. As a result, the doll therapy reduced the degree of frustration of the elderly. It is assumed that the therapy helps the elderly to recall the past. Also, the doll can create a virtual world in which the elderly can express their feelings. With the doll, the elderly also become voluntary. The effective implementation of the doll therapy emphasizes 4 processes: 1) the elderly must choose a doll, 2) health care professionals or workers should preserve their dignity providing a doll, 3) the eyes of a doll should be located straight at the eyes of the elderly, and 4) a doll should be used as a tool of the therapy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：赤ちゃん人形、BBPSD、非薬物療法、認知症高齢者

1. 研究開始当初の背景

我が国の老年人口割合は年々増加しており、2050年には65歳以上の高齢者は、全人口の3.3人に1人になると予測されている。高齢社会における最大の健康課題は介護予防であり、認知症対策はその中心的課題といえる。

認知症とは、いったん正常に発達した知的機能が脳の後天的な器質的変化により持続的に低下し、日常生活に支障をきたす症状の総称である。認知症高齢者の本質的課題は記憶力の低下や認知機能障害に伴う存在不安と言われており、それらが原因となってBPSDが出現する。従って、BPSDには原因が存在するが、その把握が困難であり、適切な対応を阻んでおり、かつ、当事者や家族の生活をしづらくさせている。認知症高齢者ケアにおいて、様々な非薬物療法が試みられているが、エビデンスは十分ではない。

人形療法是ダイバーショナルセラピーの一つとしてオーストラリアで行われ、わが国にも紹介された。2001年6月にNHK番組「関西クローズアップ現代」で、人形を抱いた高齢者が生き活きとした自分を取り戻している姿が放映され、人形が心のケアに大きく役立っていると報じられた。それを契機に人形に対する関心が一挙に高まり、高齢者ケアに人形が積極的に導入された。しかし、その後人形療法是発展することなく、研究もあまり進んでいない。先行研究として、認知症高齢者が人形を抱くことの意味他数篇^{1~2)}にとどまり、研究はまだ緒についたばかりである。

人形は「人の形」をしており、アニマルセラピーとは異なる意味合いがあると考えられる。高齢者の発達課題である自我を統合する上で、人形がどのような役割を果たすのかが明らかになれば、BPSDへの対応を可能にし、ひいては高齢者のQOLを高めることに寄与できる。

- 1) 認知症高齢者が人形を抱くことの意味：親松恵子，畑野相子，山根寛，作業療法とOT, vol. 2, No 4, 2005
- 2) 認知症高齢者にとっての人形の意味と適合素材等に関する研究：畑野相子，御船泰秀，山口浩次，田茂井宏行，山口悦子，滋賀県社会福祉学会誌, 2009)

2. 研究の目的

本研究の目的は、介護家族、介護職員、人形作家、社会福祉協議会と協働して、様々な形態の赤ちゃん人形を用いたケアを展開し、その効果を科学的に実証することである。具体的には次の3点を明らかにすることとした。

(1) 様々な非薬物療法があるが、万人に適するものはない。人形療法の認知症高齢者にもたらす効果を明らかにする。

(2) 好まれる人形の共通性と差異を分析し、人形の素材を開発する。

(3) 人形療法として確立し、非薬物療法として位置付けるとともに、その普及を図る。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

5か所の認知症対応型グループホーム、3か所の介護老人保健施設、6か所の介護老人福祉施設に入所している認知症高齢者のうち、BPSDを有し、日常生活に支障をきたしている人を対象とした。

(2) 調査内容

- ①対象者の属性（性、年齢、子育て歴 職業歴、趣味・特技、認知症の程度など）
- ②日常生活の状況
- ③人形療法時の表情、発言、人形に対する態度等の反応

(3) 情報の集積方法

- ①人形療法是施設の一定の職員が行い、観察内容を記録した。観察内容をフィールドノートに記録するとともに、写真撮影した。
- ②月1回、施設の職員と人形療法の反応を分析した。

(4) 介入方法

- ①複数の人形を示し、好みの人形を選んでもらい、その人形を用いた。表情、形態、重さ、目の開閉、硬さ、素材等が異なる10種類の人形を用いた。
- ②対象者に人形を抱いてもらう。人形を抱けない場合は、対象者と視線が合うようにして前に座らせた。
- ③話しかける内容は自由としたが、話が出ない時は参考例を参照に、語りかけた。参考例として示した内容の主なものは、「子どものころ人形で遊びましたか」「人形を見て思い出すことや感じることを教えてください」「子育ては大変でしたか」などとした。
- ④セッション時間は、30分程度とし、長くても1時間を超えないようにした。セッション終了時は、本物の赤ちゃんを認識している場合は「向こうで寝かせてきます」や「ミルクの時間です」等と話しかけ終了した。
- ⑤関心を示した人を対象に1年間継続して介入した。

(5) 分析方法

- ①対象者の人形療法実施時の表情、言葉、や態度を分析した。
- ②BPSDや日常生活状況の変化を、人形療法時の反応と関連させて分析し、効果を検討した。

4. 研究成果

(1) 174人に人形療法を試みた。人形に対する反応は、拒否は2人あったが、他の人は可愛いという感情を示した。そのうち人形療法を継続し、BPSDの変化が見られた人は37人であった。効果が見られたBPSDは、攻撃

性、焦燥感、暴言・暴力、介護抵抗、帰宅願望、落ち着きであった。その他の効果として、発語、笑顔、人形を中心に他者との交流が見られた。その代表的な事例を報告する。

①BPSD が軽減および緩和された事例

【攻撃性や暴言・暴力の減少した事例】

Aさんは、80歳代の女性でグループホームに入所していた。特定の人に「くそじじい」などと罵声をあびせたり、診察時医師に暴力を振るうなどの言動があった。好んだ人形は、目が開閉し、樹脂製の本物に近いやや小さい人形だった。人形療法開始して3か月後には暴言・暴力がなくなり、笑顔が見られるようになった。人形に名前を付け、「いいこやな」「子どもを育ててみたかった」「この子は、私だけをじっと見てくれる」などの発言が見られ、可愛がった。人形療法を開始して2年半を経過した今も人形を世話し、穏やかさが継続している。

Bさんは、80歳代の女性で、夫婦で介護老人福祉施設に入所し、別々のフロアで生活していた。夫に会いたいというので一緒にすると、杖で夫をたたくなどの暴力をふるうので、同室にはできなかった。好んだ人形は、目が開閉し、色が白い樹脂製の本物に近いやや大きい人形だった。「目が大きい。〇〇ちゃんもまつ毛が長かった」「寒かろう」など子どもとどぶらせ、いたわる言葉や見られた。人形療法開始直後から笑顔が多くなり、2か月ごろから不定愁訴が減少した。そして夫に対する暴力行為もなくなったので、7か月後に夫婦同室が可能になった。現在も、夫婦同室での生活が継続している。

Cさんは、80歳代の女性で片マヒがある。同じユニットの特定の女性をターゲットに暴言を吐くので、Cさんの視界に入れないように配慮していた。Cさんは、Bさんと同じ目が開閉する人形を好んだ。長時間抱くことができないので机の上に座らせ、目を合わせていた。普段は言語的コミュニケーションがとれなかったが、人形を前に置くと「この子、誰の子」「どこから来たの」と自らが職員に話しかけた。また、機嫌のよい時にしか歌わない金色夜叉の歌を歌い始めた。人形療法開始2か月後から暴言がなくなり、今まで罵倒されていた女性がCさんお横に居ることが可能になった。

【介護抵抗が減少した事例】

Dさんは、70歳代の女性で介護老人福祉施設に入所していた。食事以外は、ベッドに横になっていることが多く、夜も目覚めていることが多かった。移動介助時、介護者の腕をひっかいたり、大声をあげるなどの介護抵抗が強かった。好んだ人形は、目が開閉しない、やや大きめの布製の人形だった。人形の名前は日々変化した。人形を介して職員との会話ができるようになった。人形療法開始3か

月ごろ、職員が夜に「この子見ていただけますか」と依頼すると「いいで」と布団の中に入れてくれた。翌日、その職員に「あんたのこの子みといてあげたで」との発言があり、職員が「助かりました。ありがとう」というとにっこりした。この頃から介護抵抗が減少し、大声をあげるが減少した。

【自室から出て、食器洗いをするようになった事例】

Eさんは80歳代の女性でグループホームに入所していた。自室に閉じこもっていることが多く、他者との交流は少なかった。同じユニットの入居者が人形を可愛がっている様子を見て、そばに行き会話するようになった。だんだん自室から出る時間が多くなり、そのうち食器洗いをするようになった。しばらく、その状況が続いたが、下肢の痛みが出現し歩行ができなくなり、食器洗いはできなくなった。

【帰宅願望が減少した事例】

Fさんは、70歳代の女性で、一人暮らしが困難になり老人保健施設に入所してきた。夕方になると、「家に帰りたい」と言って不穏状態を呈した。Eさんと同じテーブルで食事をしている3人を含め、4人のグループで人形療法を開始した。同じテーブルで食事をしていても相互作用はあまり見られなかったが、人形療法開始後、一緒にいる時間が長くなり、話しあっている時間が長くなった。時々、個室に集まり話し込んでいた。2か月経過したころには、帰宅願望が見られなくなった。特に人形の好みはなかった。布製で、目が開閉しない人形を用いた。

【発語が見られた事例】

Gさんは80歳代の女性で、グループホームに入所していた。常に動き回り、ちょっと目を離した間に、みそ汁にクレンザーを入れるなど行動障害が顕著で、また失語症で言語的コミュニケーションはとれなかった。赤ちゃんを抱いてもらおうと、新生児を抱くように抱き、いたわる態度が見られた。足に触って「冷たい」「寒い」の発語が見られた。人形と一緒にいると、1時間程度は落ち着いてられるようになった。

【落ち着きを取り戻した事例】

Hさんは、70歳代の女性で、介護老人福祉施設に入所していた。じっとしていることがなく、収集癖があった。人形療法開始後、3か月くらいは他者が人形に触ると怒っていた。その後、他者が人形を触っても怒らなくなり、行動にも落ち着きが見られるようになった。指示が入るようになり、姿勢矯正のケアができるようになった。

【寂しさが緩和した事例】

Iさんは、90歳代の男性で、グループホームに入所していた。人形が見えると安心すると語った。好んだ人形は、目が開閉しない人

形であった。「あまり本物みたいなのは怖い」と語った。進行方向に向けて人形を膝の上に抱いたり、ベッドから見える位置に人形を置くことを好んだ。

②人形療法を拒否した事例

Jさんは、80歳代の女性でグループホームに入所していた。常に「怖い」「私いつ死ぬの」「えらい」と訴えて続いていた。Jさんに赤ちゃん人形を見せるも、「いらん。そんなことよりえらいの」と訴えたので、人形療法は中止した。

Kさんは、80歳の女性で、介護老人福祉施設に入所していた。日常生活では笑顔がなく、不機嫌そうに見えた。人形を見せても、選ぶことはしなかったため、布製の人形を渡したところ、足を引きちぎってしまったので、中止した。

③人形療法を通して、職員にとっての効果

【対象者理解する上での効果】

Lさんは80歳代の女性で、介護老人保健施設に入所していた。赤ちゃん人形を見ながら「私は、29歳の時、子どもを家において、追い出された。昔のことやけど」と語った。Jさんに離婚歴があることを職員は全く知らなかった。

【コミュニケーションにおける効果】

Mさんは、80歳代後半の男性で、介護老人保健施設に入所していた。人形を抱きながら「わしは、戦争に行っていたので、こんな風に子どもを抱いたことがない。」と語った。若い職員は、対象者の生活と戦争がこのように関連しているとは知らなかったと語った。

また、別の若い職員は、「何を話してよいかわからない。でも人形があると『人形可愛いですね』という会話ができるので、訪室しやすくなったと語った。

(2) 考察

対象の反応から、第1に人形療法の効果、第2に好ましい人形の形態や素材、第3に人形療法の確立の3点について考察した。

①人形療法の効果

認知症の人は記憶障害により過去や未来とのつながりが絶たれおり、「今、ここ」しかない。今しかないことが不安の原因となっている。人形をわが子にみたてて可愛がっていることや話の内容から、子育てをしていた頃の記憶を取り戻していると考えられる。子育ての経験を思い出すことで過去と現在のつながりができ、これが安心感につながったと推測できる。その結果、笑顔が出現し、焦燥感や暴言が減少したと考える。人形療法は、子育ての記憶の回想を促す上で効果的である。そして、子育ての経験を回想することで現在と過去をつなぐ意味があることが示唆

された。

次に、「こんな子育てがしたかった」という発言や「寒かろう」と言っただけで布団に入れたりさすったりする言動より、自分がしたかったことを人形に注いでいると思われる。認知症の人は、自分の気持ちを整理し、コントロールすることができない。したいことがあるがそれが何か分からず、イライラした気持ちを募らせ、それが焦燥感の要因となっている。潜在意識として、子育てに関する思いを有している人には、人形療法がフィットすることが示唆された。潜在化していた思いを、人形に注ぐことで焦燥感が緩和されたと思われる。人形は高齢者の気持ちの移行対象としての意味があることが示唆された。

さらに、丸く、小さく、柔かなものを人間は可愛いと感じ笑顔になる。その意味において、赤ちゃん人形はその条件を満たしている。可愛がる態度や他者のためにしてあげるといった言動が見られているのは、人形が有する特徴と関連すると思われる。他者のために役立つという愛他的感情は、自尊感情や役割意識となり、自己確認につながる。また、「自分だけを見つめてくれる」という発言は、自分が注目されている意識を強化している。さらに、重要な点は、気持ちを注ぐ主体が高齢者自身であることである。人は何かをする主体になったとき、自尊感情が刺激され、自己肯定感が高まる。愛他的感情や自己確認も自尊感情につながる。人形療法により、自尊感情が高まり、それが安心感につながり、その結果、焦燥感や暴言が軽減したと考える。人形療法は、高齢者が気持ちを能動的に表出し、人形はその気持ちを受け止める対象としての意味があることが示唆された。

②好ましい人形の形態や素材

認知症高齢者にとって、人形がどのような意味を持つかによって、人形の好みは変わる。Aさんのように、かなわなかった子育てをしたかった思いを持つ人は、目が開閉し、男児を思わせる人間に近いリアルな人形を好んだ。Bさんのように、わが子を回想する場合は、目が大きく、まつ毛が長い人形が好まれた。Iさんのように、そばに置くことで淋しさをいやしたい人は、目が開閉するリアルな人形より、人形らしいものを好んだ。高齢者が人形にどのような思いを寄せるのかによって人形の形態は異なり、万人に共通する人形の素材や形態はないことが示唆された。しかし、その中で共通していたことは、目が開眼していることと可愛さがあることだった。目は重要なポイントであることが示唆された。

③人形療法の確立

人形をいつもそばに置き、抱いてもらうだけなら療法とは言えない。療法とは、治療目的を持って意図的に行うものである。本研究

の中で確認できた人形療法の進め方とポイントについて考察した。

【導入】

人形は「ヒトの形」をしていることから、魂が入ったものとして扱うことである。自尊心を傷付けない配慮として、導入に際しては、対象者のために人形を準備したのではなく、職員が可愛いから連れてきたので見てほしいというように「職員主語」で話すことが重要である。

【展開】

対象者に好みの人形を選んでもらう。選んでもらうに当たり、何体もの人形を提示すると混乱をきたす事例もあった。「どっちがいいですか」と2～3種類の中から選んでもらうと選びやすいと思われた。人形療法のセッションは、人形、対象者、職員の3者関係で構成する。人形を介在させるが、あくまで主人公は認知症高齢者であり、能動的に気持ちや思いが吐露できるように配慮することが重要である。何かを引き出そうとするより、待ちの姿勢が重要と思われる。セッション時間は30～45分程度を目安とする。

【終結】

「いろいろお話ができよかったです」「楽しかったですか」など、感想を確認する形で終わる。本物の赤ちゃんと認識している場合は「向こうで寝かせてきます」や「ミルクの時間です」等と話しかけ終了する。

④研究の限界

日常生活は様々な要素で構成されている。人形療法により日常生活に変化が見られたが、純粋に人形療法のみ効果と言えない。また、人形療法をすることによって、職員と高齢者の関わりは普段より多くなっており、このことも、変化をきたした要因と考えられる。症例を蓄積し、エビデンスを作っていくことが重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

認知症高齢者の攻撃性に対する人形療法の効果 人間看護学研究 9号 21頁-35頁 2011.3 (査読あり)

畑野相子、北村隆子、安田千寿、嶋田裕子、御船泰秀

〔学会発表〕(計4件)

1. 焦燥感が強い認知症高齢者にとっての人形の意味 第14回認知症ケア学会 福岡市抄録集 289頁 2013.6

畑野相子、御船泰秀、北村隆子、安田千寿

2. 認知症予防プログラムの効果の検討 第2回日本認知症予防学会 北九州市抄録集 131頁 2012.9

畑野相子、北村隆子、安田千寿、山本眞喜

3. 認知症高齢者の日常生活調整における赤ちゃん人形療法の効果 日本老年看護学会 第16回学術集会 東京都抄録集 194頁 2011.6

畑野相子、北村隆子、安田千寿、嶋田裕子、菅真友子、藤森可澄、村田麻里、御船泰秀

4. 認知症高齢者夫婦の同居を可能にした赤ちゃん人形療法の評価 日本老年看護学会 第15回学術集会 前橋市抄録集 153頁 2010.10

畑野相子、北村隆子、安田千寿

〔その他〕

研究成果を用いて授業を実施している。認知症高齢者のケアに人形療法を実施している。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

畑野相子 (HATANO AIKO)
滋賀医科大学・医学部・教授
研究者番号：30405071

(2) 研究分担者

北村隆子 (KITAMURA TAKAKO)
京都橋大学・人間看護学部・教授
研究者番号：10182841

安田千寿 (YASUDA CHIZU)
聖泉大学・人間看護学部・講師
研究者番号：00381921

(3) 連携研究者

なし